

# 第8話 両上杉の滅亡

新興の北條氏にますます圧迫された両上杉氏は、同族相争うことの不利を悟って、相和して敵に当たったが、時すでに遅く、ついに全く戦いに敗れて、扇谷家が先づ亡び、ついで山内家もまた亡びる。

## 北條氏綱

北條早雲が卒した後は、その子の氏綱が嗣いだ。彼もまた勇武の士でした。伝えるところによれば、早雲はその臨終の際に子の氏綱らに遺言して、

「自分は上杉氏をほろぼして、関八州を併せようと思っていたが、まだ果たさなかった。よろしく子孫相継いで、わが志を遂げるようにせよ。決して途中で懈ってはならないぞ。今、わが領土は多くないが、わが積んでおいた財物を散じて、四方の士を養えば、相当の勢力にはなれるようにしてある。両上杉家が仲違いして互いに相争えば、わが家は居ながらにして大きくなるであろう。

つらつら上杉氏の様子を見るに、その権勢は、日に衰えつつあるから、全く滅びるのも遠くなくだろうと思うが、とはいっても、中々の大家であるから、無理をして取ろうとすると、こちらが却って手を焼く虞れがある。よくよく気をつけて、機会の到るのを待つがいい」

と言い、別に21か条の訓を作って将士に頒けたということです。この遺言の中にも、無理をしないで大きくなろうとする早雲の方針というべきものが見えます。

## 江戸城の略取

北條氏綱は父の遺訓をよく守って、しばらく隠忍しているうちに、早くも早雲が没してから6年経った大永4年の正月に、江戸城を守っている扇谷家上杉朝興の家来が、ひそかに内応して氏綱の出陣を勧めて来た。機会はいよいよ来たのです。すなわち氏綱は、急いで兵を率いて江戸城に向った。

朝興は、さきに早雲が新井城を囲んだ時に、三浦氏を援けようとして来て途中で早雲に大いに破られた人です。朝興は部下の者が敵に内通していようとはもとより知る筈も無かったので、その兵を率いて北條氏の軍を品川に待ち伏せて敵の先鋒と高輪に戦っていると、北條氏の別軍が渋谷のほうから烈しく朝興の側面を攻撃して来たので、朝興は驚いて、引き返して江戸城に入ろうとした。

ところが、江戸城内はすでに北條氏の別軍との間に連絡が出来ていて、彼を入らせなかったのも、朝興はいかんとも施すに術がなく、あわてて板橋に走った。そして、板橋の城主兄弟が彼のために氏綱の兵を防いで、ついに兄弟共に戦死している間に、辛くも逃れて河越城に入った。そこで、氏綱は、苦も無く江戸城を手に入れて、家臣を留めて、これを守らせ、自分は小田原に凱旋しました。

一方、上杉扇谷家の領国は武蔵と相模の二カ国でしたが、相模はすでに早く早雲に奪われて、今また武蔵の江戸城は氏綱に取られたのですから、そのまま平然としてはいられなかった。朝興は、いかにもしてこれを回復しようと、その後幾度か兵を出して戦ったが、いつも決まって敗れて、その勢力は衰えま

した。

かわごえじょう りやくしゆ  
河越城の略取

こうして、上杉朝興はついに無念の思いをしながら、第105代後奈良天皇の天文6年4月に。50才を以って河越城に卒したが、その一族の者に遺言して、「自分が死んだ後は、佛前の供養などはしないでいい。ただ北條氏を征伐して、わが恥を雪げ」と言ったということです。

朝興の後はその子の朝定が家を継いだが、彼はやっと13才の少年でしたから、伯父の朝成がこれを扶けた。一族家臣らと共に策を定めて、その勢力の挽回につとめる事として、先づ第一に多摩郡の深大寺の城を修めて、大いに北條氏に当ろうとした。

ところが、氏綱はこれを聞くと、その方面には目もくれずに、却って江戸からすぐに河越に進んで、その北方50余町の三木に陣を取った。朝定らは大いに驚き、あわてて軍を河越にかえして来た。時は天文6年7月15日の夕でした。月光白く地に満ちて、さながら白昼の如くであった中で、両軍は、互いに兵をはなれて大いに戦ったが、もとより朝定らは老巧な氏綱の敵では無かった。彼らはずいに全く敗れて河越城を捨て、走って、その属城の比企郡松山にのがれた。

松山城にいた上杉氏の家臣は朝定らを迎え入れると、ややその敗軍を収めて、出でて城外に陣した。あわよくば河越城を回復しようとしたのです。

まつやまじょう せま  
松山城に迫る

ところが、彼等もまた、忽ち氏綱のために打ち破られて急迫されて、却って松山城に敵を引き受けるに至った。しかし、松山城は、平野に突き出た丘陵の一端に在って、前方には遠く入間、足立の平野を望み、その麓には市川が流れて、自然の濠をなしている外に、深田が一面につらなって、



ひきぐん まつやまじょう あと  
埼玉比企郡吉見町松山城址

容易に近づき難い。うしろには小山が重畳して、そして他の三方は、削ったような断崖で岸が高かったので、逆も攀ち登ることなど出来なかった。

それで、氏綱はしばらくこの城に迫ってみたが、天然の要害に対しては無理をしないという、例の北條氏の方針に従い、間もなく兵を引き退いた。

さもあれ、河越城が氏綱の手に帰したということは、とりもなおさず、上杉扇谷家を殆ど武蔵から追い出してしまった事なのですから、氏綱の威勢はますます遠近に振るって、武蔵の豪族らはいうに及ばず、下総の豪族らまで、続々と降を乞うて出ました。

こゆみごしよ  
小弓御所

## 第8話 両上杉氏の滅亡

ところがそのころ、下総の小弓城に足利義明がいました。古河公方足利成氏の孫で、政氏の子です。兄の高基と仲がよくなかったので、逃れて、遠く陸奥のほうまで漂泊していた末に、上総の1豪族に迎えられるので小弓に来たのです。生まれつき勇猛剛毅で、度量も広がったので、総州の武士の来り属する者が頗る多く、大いに武威を附近に振るった。世にこれを小弓御所と言います。義明は、久しく古河公方が名のみでその実力が無いのを残念な事に思っていたので、やがては古河を廃して、自分が関東管領になろうとしていた。ですから勿論、北條氏などに降ろうとしないばかりか祖先の事業を回復するには、むしろ第1に先づ北條氏を倒さなければならぬとさえ思っていた。

### 里見義堯

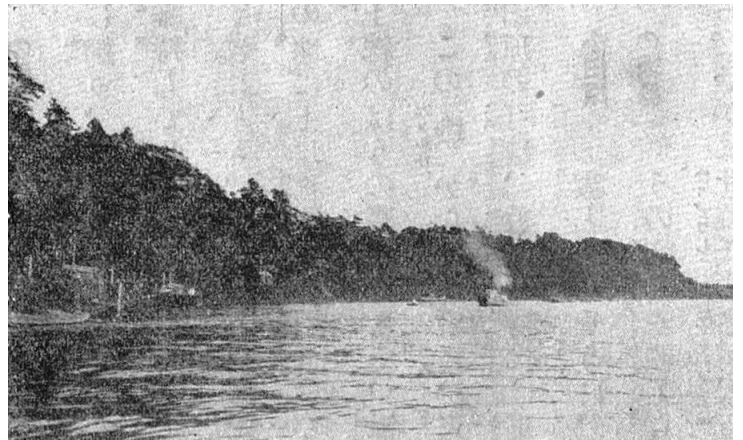
その上、彼の配下の諸豪の中では、安房、上総の領主である里見義堯に最も勢力があった。義堯もまた、僅かに東京湾をひとつ隔てたばかりの向こうに、おそるべき強敵が栄えているのを喜んではいなかった。深く義明と結んで、北條氏に当ろうとしていたこともあった。

一方、古河公方では、この時に高基は既に没して、その子の晴氏が後を継いでいたが、晴氏の妻は氏綱の娘でしたので、北條氏は晴氏を支持していた。それで、氏綱は晴氏と共に、小弓御所義明の野心を知ると、その勢いの未だ大いに盛んにならない前に、先づこれを討って滅ぼそうと、すなわち、密かにその用意にかかった。

### 鴻台の戦い

小弓城に在ってこの事を聞いた足利義明が、どうしてじっとしておられよう。彼はすぐに里見義堯と共に、房総の兵を率いて下総の鴻台に出て陣取った。この鴻台は、前面に江戸川の流れを控えた丘陵で、すぐ目の先に江戸を望むことの出来る險要な地です。

彼はすでに機先を制したつもりでいた。苦も無く北條氏の軍をここに迎え撃って、その



千葉市川市 鴻台  
今は一般に国府台と書く。崖下を流れるのは江戸川

勢いに乗じて、一気に江戸城をも屠ろうというくらいの意気込みでした。相手は音に聞こえた老巧な武将ですから、十分に念を入れて、大事な上にも大事を取るべきであったにもかかわらず、何という浅はかな事だったでしょう。義明は自分の勇に誇って、北條氏の軍を軽んじたのです。

### 房総軍の敗走

時は天文7年10月、北條氏綱は伊豆、相模、武蔵の兵20,000余を率いて江戸城に着き、部署を定めて、松戸のほうから鴻台に迫って行った。彼は義明が陣を江戸川の中流に張って、正面に敵を受けて大いに勇戦しようとしているのを見ると、1軍をそれに向けて攻め立てながら、主力は江戸川の上流を渡って、

## 第8話 両上杉氏の滅亡

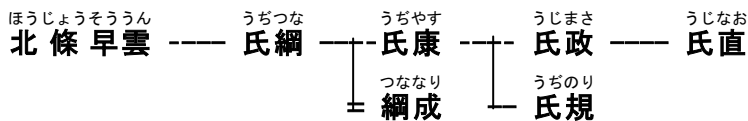
そくめん よしあき よしたか きゅう おそ たちま そうくず はいそう  
 側面から義明、義堯らの軍を急に襲わせた。そのため、房総軍は忽ち総崩れとなって敗走したが、この  
 よしあき よしたか ざんべい こゆみ よしあき ようじ つ  
 時、義明はついに戦死した。義堯は残兵を集めて小弓に帰り、義明の幼児を伴ってひそかに安房にのがれ  
 きゅうりょう いじ くだ  
 た。彼は、その後も久しく旧領を維持して北條氏に降りはしなかった。

けれども、こうのだい うぢつな よしあき さとみし くぢ  
 けれども、鴻台の1戦に氏綱は足利義明を討ち取り、里見氏の勢力を挫いてからは、関東の地にまた  
 きっこう しもふさ かづさ すす  
 北條氏に拮抗する者は無くなった。下総の豪族らは言うまでもなく、今は上総のほうの豪族まで、進んで  
 しはい  
 北條氏の支配を受けました。

### おだわら はんじょう 小田原の繁昌

この戦いから3年後、天文10年7月19日に、北條氏綱は55才で亡くなったが、小田原の町は、彼  
 いっそうはんじょう みやこ そうらん しょうし あい  
 の時代に一層繁昌して、関東第一の都となった。彼もまた父早雲と同じように、よく将士を愛し、人々  
 きない さいごく しょうにん しょうこう はる さ うつ き  
 をいたわったので、機内や西国のほうの商人や職工らまで、遥かに乱を避けてここに移って来たというこ  
 とです。いかに北條氏の名が天下に轟いていたかが分かります。

今も小田原名物の一つとなっている外郎の先祖が、京都から移って来て、透順香を始め、様々の薬品を売  
 だ うぢつな じんじゃぞうえい こうじ もっと ぎこう よう こうじん  
 り出したのも氏綱の時であったというし、又当時、神社造営の工事などで最も技巧を要した工人  
 す うぢつな ほご ものども  
 の多くも、早くから小田原に住んで、氏綱の保護を受けた者共だったといひます。



### ほうじょううぢやす 北條氏康

うぢつな うぢやす つ ふそ  
 氏綱の後はその子の氏康が家を嗣いだ。彼もまた父祖  
 おと えいゆう すこぶ おくびょう てつ  
 に劣らぬ英雄でした。12才のころまでは頗る臆病で、鉄  
 ぼう 音を聞いても驚くほどだったというが、後に深く自らを  
 は ねっしん ぶじ なら ぶゆう  
 恥ぢて、熱心に武事を習いついには武勇の人となって、ます  
 ます北條氏の勢いを盛んにした。



ほう じょう うぢ やす  
 北 條 氏 康

### りょううえすぎ こがくぼう れんごう 両上杉と古河公方の連合

このころ、両上杉氏はまた互いに相対抗して、勢いを争っていたのですが、さきに上杉扇谷家が河越城  
 うば おとろ やまのうちけ くちびる ほろ は さむ しだい  
 を奪われて、にわかには大いに衰えてからは、上杉山内家もまた、いわゆる唇亡びて齒が寒く、次第に北  
 あっばく かん  
 條氏の圧迫を感じずにはいられなかった。

やまのうちけ のりまさ どうぞくあいあらせ ふり さと おうぎやつけ ともさだ わぼく こがくぼう  
 それで、山内家の憲政は、同族相争うことの不利を悟って、扇谷家の朝定と和睦して、更に古河公方  
 はるうち と みかた しんこう  
 足利晴氏をも説いて自分の身方とした。もとの関東管領の者らがその勢力を1つにして、新興の北條氏に  
 あた はるうち うぢつな うぢつな ぎきょうだい あいだ  
 当ろうとしたのです。晴氏は前にも言ったように、氏綱の娘を妻としていたので、氏綱とは義兄弟の間  
 がら りがい よしみ なに す かえり ふうちょう はるうち  
 柄でしたが、利害の上では、兄弟の誼みも何も棄てて顧みないのがそのころの風潮でしたので、晴氏も

## 第8話 両上杉氏の滅亡

また、当然のことかの如くに、北條氏と結んだ年来の関係を絶って、両上杉と事を共にすることにしましたので

す。  
こうして、両上杉の憲政と朝定とは着々と用意を進めていたが、はるかに駿河の今川義元と結んで、背後から北條氏を討たせることに約束が出来ると、すなわち天文14年9月、先づ河越城を奪い返そうと、80,000の大軍を率いて来て城を囲んだ。10月には足利晴氏も親ら兵を率いて河越に着いた。

### 黄八幡綱成

河越城の守将は武勇を以って聞こえた北條綱成です。彼はもと、源氏で、本姓は福島氏でした。代々今川氏に仕えて、1城の主となっていたのですが、幼少のころに、父が義元に殺されたので、彼は逃れて小田原に来て氏綱に仕えた。長じるに従い、すこぶる氏綱に愛されて、ついにその娘の婿となって北條氏を称しました。

一生涯の間に軍に臨むこと37年間で、36回の大戦に出会ったが、かつて1度も負けたことがなかったといわれる勇将です。いざ戦いという時には、彼はいつも真っ先に進んで、しきりに「勝った、勝った」と叫ぶと、部下の者も一斉にこれに続いて、「勝った、勝った！」と叫びながら突撃したので、向かうところ必ずつ勝ったということです。背標に黄色の旗を用いて、これに「八幡」の2字を書いて号としていたので、世に黄八幡と言われました。

### 河越での籠城

とはいえ、城兵は僅かに3,000にも満たなかったのに、敵は何十倍の大軍で、十重二十重に城を囲んでいるのです。それこそ蟻の這い出る隙間も無かったほどで、もとより糧道は絶たれていました。にもかかわらず、綱成は固く守って少しも怯まずに泰然としていたが、やがて籠城が半年以上になって、翌15年の春になると、さすがに城中の兵糧も乏しくなり出した。

### 決死の弁千代

氏康ははるかにこの包囲を聞いて心を痛めていたが、漸くこのころになって、今川氏との間に和を講ずることが出来たので、今は背後を襲われる心配がなくなったので、急いで河越城を救おうと決心した。しかし、自分が行かない前に、城兵が失望して死を決するようなことがあってはならないが、どうしてこれを城中に知らせたらよからうか？

彼は独りで思案に余って、「誰が行って、これを告げる者はいないか？」というとき、綱成の弟の弁千代が、年ようやく18才で、氏綱の左右に侍していたが、進んで言いました。「どうぞわたくしをやって下さい。万一、敵に捕らえられて、たとえばどんな拷問をされましても、死んでも秘密は申しませんから」と。そこで氏康は言った。「よし。では行って兄に言え。もう暫くの辛抱だから、わしのために固く守ってくれよ、ここ数ヶ月の間に必ず両上杉に勝って囲みを解くから、決してはやまって、打って出て死を決してはいけない」と。

弁千代は心得て、単騎で出発したが、武蔵に着くと、巧みに姿を上杉氏の兵に変えて、敵の陣営に紛



## 第8話 両上杉氏の滅亡

えき さわ まど そうぞう のりまさ はるうち から に ともさだ みだれいくさ う  
益に騒ぎ惑ったかが想像されます。 憲政と晴氏とは辛くも逃げたが、足利朝定は乱軍のうちに討たれて死んだ。

よ あ き か うぢやす あんがい こぜい く や  
夜が明けはなれてから、上杉氏の麾下の諸将は、氏康の兵が案外にも小勢であったのを知って大いに口惜しがり、相手の疲労が回復しないうちにこそ再び戦おうと、引き返して河越に来て見たが、この時、氏康はすでに松山城を落としてそれに拠っていた。 彼は啻に、河越城を救ったばかりでなく、更に余勢を駆って松山城までも奪ったのです。

うぢやす めいせい くだ もの  
氏康の名声がこれよりもますます高くなったのは言うまでもない。 その日のうちに、彼に降った者が関東の豪族だけでも90余人に及んだといわれる。 わけても武蔵の国では、独り岩槻城の大田資正（大田道灌の曾孫）だけが最後まで山内家のために忠義を尽した他は、この時ことごとく氏康に降った。

### 上杉憲政は越後に奔って長尾氏に頼る

のりまさ えちご はし ながおし たよ  
さて、憲政は逃げて上野の平井城に還ったが、彼の部下の将士らもまた次第に北條氏に降ったので、その勢いは日に月に衰えるばかりでした。 しかも氏康は、この死にかけているような上杉氏に最後のとどめを刺そうと、天文20年の春、黄八幡綱成を先鋒として、兵20,000を率いて来たり攻めた。 暫くの間は、上杉氏家臣の大田資正らが上野と武蔵の境で拒いで見たが、やがてそれも打ち破られると、憲政はついに平井城をも支えきれなくなって、その年の12月、上野を棄てて越後に奔った。

### 両上杉氏の滅亡

ながおかげとら たよ たす え うえ  
もとの家臣の長尾景虎を頼って、その援けを得ようとしたのです。 しかし、間もなく、彼はそこで、上杉の姓と関東管領の職（注：上杉氏はもと関東管領の執事でしたが、管領が自ら公方と称するに当り、執事を管領と称させたのです）とを景虎に譲って、自分は景虎の保護の下に余生を送ることにした。 かくて、先に朝定が死んで先づ扇谷家が滅びた上杉氏は、上杉山内家もまたここに亡びたのであります。 上杉氏が関東の執事となってから凡そ200年でした。

### 古河公方も亡ぶ

はるうじ かわごえ こが うぢ  
又、古河公方足利晴氏は、さきに河越で敗れると、逃げて古河に帰っていたが、天文23年11月に、氏康のために古河城を攻め落とされて、相模の波多野に押し込められた。 そして家は、末子の義氏（氏康の妹が生んだ）が嗣いだが、これはただ公方家の名義を保っていただけでして、もはや全く何の勢力もなかったのです。 晴氏は、後に間もなく幽閉を解かれて、下総の関宿城に居らされたが、永禄3年の5月に、さびしくその一生を終えました。

### 北條氏康の武略と政治

うぢやす ぶりやく せいじ  
さて氏康は、その後も越後の上杉謙信と戦い、又、安房の里見義弘、甲斐の武田信玄らとも戦ったが、殆どいつも負けたことが無かった。 その領地は、すでに伊豆、相模、武蔵、上野などの諸国におよび、この外にもなお下総、上総のほうに、彼の命令を奉ずるものが多かった。 しかし彼は、ただ戦いに巧みであ

## 第8話 両上杉氏の滅亡

ったばかりではなかった。また、文学を好み、しばしば和歌や連歌の会などをも開いて、自分も楽しみ、将士らをも慰めた。乱世の英雄としては誠にめづらしいことでした。

彼が父祖の風を享けて、よく国を治めたこともまた有名です。殊に部下を愛し、人々を深くめぐんだので、独り領内の士民がこれになつたばかりでなく、諸国の人々もその政治をしたって、続々と小田原に集まって来たといひます。

こうして、早雲がここに移ってから3代、凡そ70年の間に、小田原の町は、北條氏の勢力が盛んになると共にますます繁昌して、ついに日本国内で有数な城下町となつたのでした。

( 第8話 両上杉氏の滅亡 終わり。 次は前頁に戻り、第9話 上杉謙信と武田信玄 へ)